第一小学校シンボルツリー　学校教育目標「夢を持ち、学び合い・支え合う児童の育成」

くすのき

西合志第一小学校
学校だより 第11号
文責 校長 西村羊治
令和6年5月7日

校訓「かしこく やさしく たくましく そしてふるさとを愛する子どもに」

星野富弘さんを追悼

５月１日（水）の朝刊に「星野富弘さん死去」の記事が掲載されていました。とても残念に思いました。私は１８歳（大学１年）の時に事故で第５頸椎（首の骨）を圧迫骨折しました。８時間以上に及ぶ大手術で首には大きな傷があります。しかし、５７歳になった今でも両手・両足が動き、生活に不自由なく過ごしています。

私が星野富弘さんを知ったのは、教師になってから数年後のことでした。星野富弘さんは、群馬県の中学校の体育の先生でした。専門は体操で床の上での宙返りなどお手のものでした。部活動で生徒に手本として実演をしたとき、空中で回転しすぎて頭から床に激突し、第４頸椎を損傷したまま全身が動かない大怪我をされ、過酷な入院生活をされました。長い入院生活をされる中で、口に筆を加えて植物などの絵を描くようになられました。首の骨を折ったこと、教師であること、手術後の大変苦しい入院生活をされたことなど、私との共通点を思い出しながら星野富弘さんの書籍をむさぼるように読んだ記憶が今でも鮮明にあります。私は、中学校でも小学校でも星野さんの体験をもとにした道徳の授業にも取り組みました。時間をつくって、芦北にある星野富弘美術館にも行きました。

私は、大怪我をされたが周りの人たちの支えを受けながら、力強く優しさに満ちた作品を創作され続けた星野富弘先生には、大きな影響を受けました。その先生が、７８歳の生涯を終えられたことに、「お疲れ様でした」「ありがとうございました」「やすらかにお休みください」などを心の中でつぶやく私がいます。私は１８歳での手術の前日に、麻酔科の先生に「よかったねー、普通だったら命はなかったよ。君は、これからせなんこつがいっぱいあっとばい！」と言われました。そのときはピンとこなかったのですが、今になって考えると私が「熊本の教師となり、熊本県の子ども達に関わることのできる仕事を続けていくことだったのかなぁ」と思うことがあります。生かされた命を星野富弘先生のように大切にしていこうと思います。

第一小のみんなも、自分やお友達の大切な命を守る気持ちを大切にしてください。

星野富弘さん死去

詩画作家、芦北に美術館

78歳

手足が不自由で、口にくわえた筆で詩や絵画を創作する星野富弘（ほしの・とみひろ）さんが4月28日午後6時32分、呼吸不全のため群馬県みどり市の病院で死去した。78歳。群馬県出身。葬儀は近親者で行う。後日、お別れの会を開く。

中学教諭だった1970年、クラブ活動指導中の事故で首から下の身体機能を失った。入院中、見舞いにもらう手紙への返事を書きたくて、口で筆をくわえて字を練習。次第に詩や絵画を創作するようになった。

草花の水彩画に詩を添える作風で知られ、国内外で多数の個展を開いた。出身地のみどり市に「富弘美術館」がある。2006年に群馬県の名誉県民となった。

熊本では県立美術館で1994年、群馬県外初となる大規模展が開催。これをきっかけに2006年、芦北町に「町立星野富弘美術館」が開館した。

「優しさあふれ 作品から勇気」

県内から惜しむ声

詩画作家の星野富弘さんの訃報を受け、熊本県内の美術関係者らは作品をたたえ、死を悼んだ。

洋画家・版画家の坂田燦（あきら）さん(87)＝熊本市南区＝は県立美術館副館長を務めていた時、群馬県の星野さんの自宅に通って1994年の大規模展を実現した。

口に筆をくわえ、創作に打ち込んだ星野さん。坂田さんは「虫になったような目で対象を一つ一つ確かめながら精密に描く。私も一度やってみたが全くまねできなかった」と振り返る。

最後に会ったのは昨年10月末。体調は思わしくなく、「元気になって、また一緒に頑張って絵を描こう」と励ましたが願いは届かなかった。「心にぽっかり穴が開いたよう。残念です」と声を落とした。

芦北町に「星野富弘美術館」が開館した際には、星野さんも来場。「たくさんの人が気軽に来てくれるような場所にしてほしい」と語ったという。

福田貴司館長(61)は「星野先生の優しさあふれる作品を見て、『明日からまた頑張ろう』と勇気をもらい、感動した人は多いはず」と称賛。「先生への感謝の気持ちを込めて美術館を守り続けたい」と決意を新たにした。

（澤本麻里子、伊藤恩希）

← R6.5.1（水）
熊本日日新聞

星野富弘さんが、口で描いた作品の一つ